

文化

松本侑子著

『神と語って夢ならず』を読む

△岩田 英作▽

出雲市出身の作家松本侑子さんの最新作『神と語って夢ならず』は、隠岐を舞台にした、作者初の歴史小説である。

幕末の動乱の中、隠岐の島後では、尊王攘夷をかかげる島民たちが江藩の役人を島から追い出して自治政府を樹立した。いわゆる「隠岐騒動」と呼ばれるこの出来事は、3カ月足らずで自治の終焉を迎えたといえ、1871年のパリ・コミュンより3年早い、世界初の民衆自治の政府としてその名を歴史



神と語って夢ならず

友らと熱く語り、奔走する。幕末のヒーローと言えば、土佐の坂本龍馬や長州の高杉晋作がすぐさま思い浮かぶが、ここ島根の隠岐にも、新しい時代を切り開こうとする若き血潮がたぎっていたのだと、本作品を読んだらためて気づかされた。ヒーローは時として理想化され、形骸化しやすい。しかし、本作品の

情移入して、幕末の空気を彼のまなざし、彼の心によって追体験することができる。松本さんによると、この小説の7、8割は作者自身による創作だそうである。しかし、残りの2割の史実に対する作者の並々ならぬこだわり、精緻な考証なしには、これほどたしかな読みごたえは獲得できなかったはずである。日本初の全文訳『赤毛のアン』シリーズ、太宰治と愛人山崎富栄を描いて新田次郎文学賞を受賞した『恋の蜜』、そしてこのたびの隠岐騒動と、このところの作者の関心事は実に幅が広い。

松本さんによると、この小説の7、8割は作者自身による創作だそうである。しかし、残りの2割の史実に対する作者の並々ならぬこだわり、精緻な考証なしには、これほどたしかな読みごたえは獲得できなかったはずである。日本初の全文訳『赤毛のアン』シリーズ、太宰治と愛人山崎富栄を描いて新田次郎文学賞を受賞した『恋の蜜』、そしてこのたびの隠岐騒動と、このところの作者の関心事は実に幅が広い。

渾身の歴史小説

隠岐騒動 新たな史実発掘も

に残す。

小説の主人公は、島の若き庄屋で、自治政府の立役者の一人である井上整介。実在の人物だ。隠岐の海に現れた黒船の脅威に攘夷の志を抱き、農民らに重税をかけて島民の声を聞かさない松江藩に憤る整介は、誰か

放蕩も、はては公金に手をだしてしまったり、なんとも人間味たっぷりな描かれている。読者は等身大の整介に感

情移入して、幕末の空気を彼のまなざし、彼の心によって追体験することができる。松本さんによると、この小説の7、8割は作者自身による創作だそうである。しかし、残りの2割の史実に対する作者の並々ならぬこだわり、精緻な考証なしには、これほどたしかな読みごたえは獲得できなかったはずである。日本初の全文訳『赤毛のアン』シリーズ、太宰治と愛人山崎富栄を描いて新田次郎文学賞を受賞した『恋の蜜』、そしてこのたびの隠岐騒動と、このところの作者の関心事は実に幅が広い。

もう一つは、1983年に隠岐で見つけた、部教授

（島根県立大短期）
（光文社・18990）